

東京鷹桜同窓会報



(昨年の総会・懇親会。台風接近の混乱の中 90 名が参加された。7 ページ今憲行さんのレポートを参照ください。)

つながろう！世代をこえて

会長 守谷次郎 (昭和 38 年卒)



昨年、私ども 38 年卒は卒業 50 周年を迎え、平成 25 年度鷹桜同窓会「同窓生のつどい」に特別招待学年として参列できた。「同窓生のつどい」には卒後 30 年の「つどい学年」と特別招待学年があるが、昨年の出席状況をみると、前

者は 56 名で後者は 69 名でした。事務局の予測よりも 38 年卒の出席が多かった、という。「同窓生のつどい」を後に、会場を「はぎ苑」に移しての同級会。何と出席者は 91 名でした。夕方からの開会であったので午前中に所用を済ませて出席した人や同窓会と同級会を天秤にかけて「知り合い」の多い同年の気安さのある同級会を選択した人も多かったことによるものだろうか。このような傾向は各卒業年次の同級会についても言えるのではなかろうか。今後の同窓会総会等に人を集めるには同級会をいかに接続できるかに係っていると言ってもよいのではないか。東京鷹桜同窓会管内で各卒業年次の音頭

を執る、自薦他薦の代表者は学年幹事として参画して頂きたいものだ。極論すれば同窓会懇親会の場で同級会をやればいいのです。

同窓会とは故郷の散歩道と昭和 59 年当時の吉田副会長が会報に書いている。母校を中心とした人と人との繋がりの中で忽ち故郷を思い浮かべる縁になるというのです。しかし、初めて参加した時は「知っている顔が殆ど見当たらず戸惑いを覚える」のが大半だろう。同窓会の存在については近年の卒業生は同窓会入会式を経験しているので大半は承知している。「自分から同窓会に出席しようとする切っ掛けがない」と聞くが、古いイメージによる嫌悪感や戸惑いなのか、また、年代として会費が高いことから足が向かないのか。同窓会会合での楽しみ方として会報第 31 号で鰐淵会員 (昭 29 卒) は「同窓会三つのキーワード」として出身地・趣味・仕事を話題として参加すれば盛り上がるのではないかと提案されている。同窓会を将来に向けて機能させていくには各世代を越えて参画して同窓の絆を高めていくしかない。このため、処方として考えられるのは、年代別懇親会費の検討、会員の気楽に知り合える機会の作為、懇親会担当幹事学年の復活による目先を変えた運営及び年度テーマ (キャッチフレーズ) の発信等活性化に向けて検討していきたい。

継続することは面白い

昭和 30 年卒 芳賀 文治



冬の朝まだ暗いうちに荒砥発 5 時 50 分の蒸気機関車の列車で長井高校へ通学してから約 60 年、振り返って足跡を見つめてみました。

中学時代に出会った美術の先生、卓球の面白さを教えていただいた和尚さんと二人の恩師との出会いがそのまま人生に繋がって今日があると感謝の念で一杯です。

1 芸術（美術）を楽しむ

美術の先生は長井高校でも同じN先生でした。「作品を制作するときは全体と部分の関係をよく観察し面と塊で捉えること、線は面と面との接するところに見えるが実際に線はない」とよく話しておられたことを思い出します。

美術を通しての人間教育の教職の仕事に携わってきましたが、特に心に残ることは毎年行っていた学生と共に一ヶ月に及ぶ美術探訪の旅でした。

安い費用での旅ですのでホテルでの食事は朝だけで昼は外食、夜は電気釜でつくり学生との会食が殆どでした。交通手段は殆どがバスで、ローマからジェノバ、モナコ、ニース、カンヌの地中海沿岸を通りプロヴァンス地方のアルルの跳ね橋、セザンヌの描いたサントビクトワール山等を眺め、バルビゾンか



らバリに入ったこともありました。

ゴッホの入院していた病室、スペインのマラガでのピカソの生家等をも見て廻りました。

回教国のモロッコでは世界文化遺産フェズ市、マラケシュ市の旧市街地(迷宮)は強い印象として焼きつきました。旅のスケッチもまた楽しい。

2 卓球も面白い

中学生の時に万年山和尚さんから手ほどきを受け、いくら打っても跳ね返ってくるラリーにとりつかれました。長井高校時代は体調を崩し、余りやりませんでした。上京してからは継続しておこない現在も健康のためにやっています。

この卓球もやればやるほど奥深く面白く、日本のみならず世界ベテラン卓球大会等でリオデジャネイロまでも足を延ばすようになりました。

その中で思い出に残るのは、第31回世界卓球選手権大会(昭和 46 年 3 月～4 月初旬)に審判員として参加、女子ダブルス戦と女子シングルス戦 2 種目の決勝戦の主審を務めたことが誇りです。

丁度その頃の世界は東西の冷戦状態でありましたが、この卓球大会が契機となり日中国交、米中国交回復となりました。

卓球でのもう一つの思い出は、平成9年に山形で開催されたねりんピックに東京都代表で参加し優勝できたことです。その時の故郷の温かい心の「おもてなし」は最高でありました。



美術は仕事、卓球は健康維持のための余技として継続していますが、どちらもやるほどに面白く、奥深く終わりが見えてきません。

「夢を失う時、人は老いる」を生活信条に据えて、

用具を持ち替えての両立を継続して行きたい。

橘曙覧の「独楽吟」を模して、笑ってください。

楽しみは 白いキャンバスと対峙して

想いの色をサーーとおくとき

楽しみは 今年の優勝 いくつかと

指折り数えて 夢をみるとき

◆写真 左の絵は、スイスのルツェルンのカペル橋

右は、ダブルス優勝の鄭敏之(左)林慧卿組(中国)、なおシングルスは両者の決勝戦で、林が優勝、鄭が第2位

Energy for Peace 『死海を生き返らせ

平和を作るサンシャイン計画』

イスラエルとパレスチナ紀行

副会長 黒澤 俊雄 (昭和 31 年卒)

昨年、六月と十一月に、パレスチナとイスラエルを旅行した。この地はメディアからは、争いばかりが報道されるので、日本人には、あまり良い印象をもたれていない。今でも、ガザ地区では、争いが続けられているので心が痛む。



しかし、その様な悪い話ばかりではない。

この地の人々の中には親日家が多い。両国では、共に武道が盛んだ。殊に柔道が盛んで、柔道着を背負って街を闊歩している少年の姿が目立つ。

ユダヤ人（イスラエル人の大多数）から、日本人は尊敬されている。第二次世界大戦中外交官だった杉浦千畝氏が大量の旅券を発行してユダヤ人を助けた事によるもので、氏を命の恩人としている。この事は小中学校の歴史の授業で習うそうだ。

日清、日露戦争の資金調達に協力してくれたのはユダヤ人だ。マークス・サミュエルもその一人である。高校を卒業すると父から贈られた三等船室の片道切符で辿り着いたのが横浜港であった。湘南の海岸を散歩していた時、美しい貝殻に魅せられた。これを加工して商売し大成功を収めた。のち石油採掘の事業を興した。社名には成功のルーツを記念してシェルの名を冠した。シェル石油である。彼が日本を愛した証でもある。彼は日清戦争の勝利に貢献した事で明治天皇から勲章を授けられた。

また、パレスチナを旅行すると、難民キャンプが目につく。とくにヨルダン川西岸の荒地には、掘っ立て小屋とでも言うのだろうか素人作りの粗末な小屋が点在する。生活の臭いがするが、とても貧しい。日本で言えば、終戦直後の風景に匹敵するか、それ以下かも知れない。

ところが、驚いた事に、三年前の東日本大震災の時に、この難民の人達が、なけなしの財布の中からお金を持ち寄って、義捐金を被災地の人達に贈ったそうである。この事を聞いて、涙が止まらなかった。美しい話ではないだろうか。

この地に、死海と言う湖がある。面積は琵琶湖の約1.5倍である。この湖面の水位は、海拔-300mである。即ち海面より300m低い所だ。これは世界で最も低位置にある湖である。この死海、30年前は、海拔-270mだった。毎年1mずつ水位が下がった事になる。河川から流入する水量と湖面から蒸発する水量がバランスしていた時代には一定の水位が保たれていたが、近年このバランスが崩れ水位が下がってしまった。この原因は地球温暖化である。湖面の水位が下降しているということは、面積が縮小している事でもある。

死海は、イスラエル、パレスチナそしてヨルダンの三国に面しているの、死海が縮んでいく事は三国共通の心配事である。何故ならば、死海は貴重な水資源であり、観光資源でもある。死海に含むミネラルも貴重な資源であり、三国共通の宝物であるからだ。

そこで、地中海の水や紅海の水を死海まで引いて、300mの落差を活用して水力発電する事を提案した。発電のみならず、淡水化によって生活用水、農業用水、工業用水に活用出来る。日本には優れた淡水化の技術もあり、実現可能性を紹介した。

十一月の旅行は、パレスチナ建国記念の祭典に招待を受け、ミッションとしての参加が目的だった。大統領府と、死海に近いエリコ（ジェリコ）市庁を訪問する事が出来た。大統領府では、アッパス大統領と謁見。エリコ市では市長をはじめ市の幹部との会合で、「死

海を生き返らせるサンシャイン計画」の発表と討論する機会が与えられた。

イスラエルでは外務省を訪問し、元駐日大使のエリ・コーエン氏を尋ね会合をもつ事が出来た。コーエン氏のはからいで、ヘブライ大学と商工会議所でもミーティングをもつ事が出来、「死海を生き返らせるサンシャイン計画」の発表と話し合いの機会が与えられた。

「死海を生き返らせるサンシャイン計画」は、唯、死海の水位をあげる事と、水力で、電気を作る事が目的ではない。このテーマを、イスラエル、パレスチナそしてヨルダンの三国の担当者が一つのテーブルで共通のテーマを話し合える事が最大の目的である。この事を通してこの地に平和が訪れたら、これに勝るものはない。

「Energy for Peace」が実現出来る事になる。ユダヤ人やパレスチナ人への恩返しになればと思いつつ提案した。

以上の事を、同窓会の懇親会で話す機会を得、披露したところ、いたく感銘された役員がおられた。彼女から「良い話なので、書くべきだ」と勧められペンを取った次第である。

近況——世間の片隅で

佐藤 安（昭和36年卒）



長井南高校を卒業して53年が過ぎました。ここ神奈川県の一隅に住みはじめて40余年になります。その間30数年の教員生活を経て、今は住んでいるまちのボランティア活動中心の生活をしています。最近経験した、町内のある方からの相談をめぐるエピソードを紹介して東京鷹桜同窓会会報紙面を汚すことをお許ししたいと思います。

今年の桜の頃、ボランティアチームの一員（仮にAさんとしす）と近所の老婦人（同じくBさん。以下登場人物はイニシャルで表記）が連れ立って私を訪ねてこられました。Bさんは90歳ぐらいの方で数年前にご主人を亡くされました。私も以前から存じ上げている方です。

相談は、Bさんご自身が年老いて障害を負った娘（Cさん、60歳ぐらい）の先行きが心配だ。ついてはCさんに成年後見人を付けること、安心して生活できるよう施設への入所を考えている、どんなものだろうか、ということでした。

相談は、Bさんご自身が年老いて障害を負った娘（Cさん、60歳ぐらい）の先行きが心配だ。ついてはCさんに成年後見人を付けること、安心して生活できるよう施設への入所を考えている、どんなものだろうか、ということでした。

1回目の相談会を、チーム員で民生委員（Dさん）にも参加してもらい、Aさん、Bさんと私の4人で行いました。その結論は、①市内で後見人活動をしている専門家の話を聞く場を設ける、②施設入所については、市内の障害者相談サポートセンター（市の委託を

受けて障害者支援NPOが運営している)に相談するよう手配する、というものでした。

2回目の相談は3週間後でした。後見人活動をしている社会福祉士(Eさん)に町内に来てもらって、チーム代表のFさんが加わり5人で相談会を開きました。Dさんは都合で欠席。主にEさんがCさんの生い立ちや家での様子、妹さん夫婦のCさんへのかかわりなどを尋ねました。その後みんなで話し合った上の結論は、①妹夫婦が本人について親身に考えてくれている様子から、今後のことは妹夫婦とよく話し合い、制度利用はその後に検討しても遅くはない、②入居施設(グループホーム)利用についても今すぐにということではなく、世間の人と触れ合うためにデイサービスなどを利用しながら検討してはどうか、ということでした。

そして3回目。いや、これは相談会ではなく、BさんがAさん宅を訪ねてこられて、妹さん夫婦と話し合った結果、①妹さんは持病のため日常の世話は難しいが、経済的側面は世話をする、②Cさんの施設入所については主治医の病院が数年のうちにグループホームを建設するらしいのでそれを待って検討する、ということでした。そしてBさんCさん親子と私たちボランティアチーム員と、社会福祉士のEさんを誘って茶話会をしたいねとBさんが言っていて、さらにBさんはEさんのことを気に入った、娘のCさんもきっとEさんのことが好きになると思うともいっておられたそうです。近いうちににぎやかで楽しい茶話会ができそうです。

実は、AさんとBさんとは町内の同好の集いで知り合っていて、Bさんは若いAさんに全幅の信頼を置いています。成年後見人のEさんは、かつて私が数年間オンブズマン活動(高齢者や障害者施設を訪問して入居者の苦情を聞いて、当該施設にその解決策を講じるように勧告する市民活動)をしていたとき一緒に活動していた仲間です。もちろんA、D、Fの皆さんと私は同じボランティアチームの仲間です。それに私は、教員時代から市内のさまざまな障害者団体の方々と付き合いがあり、市役所の障害福祉課の何人かの職員とも知り合いの関係があります。我田引水気味ですが、そういった偶然のように見える繋がりが、BさんCさん親子の行く末を支え、見守る地域的ネットを創りつつあるような気がしています。

このようなことを、日頃から親しくしていただいている社会学研究者に話したところ、「ああ、いいな!これは社会学だなあ」と言ってくださいました。私は、くすぐったくも少し嬉しくなりました。



NHKBS1・スペシャル番組

『山本五十六の真実』

昭和41年卒 工藤 美知尋
(青山IGC学院長・海軍史研究家)



【1】8月11日(月)、NHKBS1から21:00~22:50まで、スペシャル番組『山本五十六の真実』が放映されました。この中で、私は解説者の一人として出演しました。

この会報誌が刊行されるのは9月1日頃ですから、皆様におかれまして

は、上記の番組を既に観たという方もいらっしゃるでしょうし、「残念ながら……」と言う方も居られると思いますが、ここでは今回の番組の放映までの製作過程とエピソードなどについて、ご紹介したいと思います。

私のもとに、NHK側から番組協力の依頼があったのは、今から7ヶ月前の2月10日のことでした。それから番組制作が終了した7月末までの半年間、さまざまな形で番組制作に協力し、多くの方々と知り合うことができました。非常に慌しく、落ち着かない日々でしたが、なかなか得難い経験もしました。

私は毎年2月初旬から1週間余り、オーストリアのウィーンに赴くことにしています。今から40数年前、24歳から26歳にかけての2年間ウィーン大学に留学していました。従ってこの街は、私にとっては第二の故郷なのです。

渡航して4日目の2月10日の朝8時頃、突然携帯電話が鳴りました。前夜はウィーン国立歌劇場で4時間を超えるドヴォルザーク作曲のオペラ『ルサルカ』を観て、深夜1時過ぎにベットに潜りました。寝不足からくる重い頭のまま携帯を取り上げてみると、東京からのメールが入っていました。

そこには、「こちらはNHKの制作会社の【アンダリン】と言うグループですが、実は昨年12月、NHK側から『山本五十六の真実』と題する番組が正式に承認されました。つきましては、先生に解説を是非お引き受けいただきたいと思っています。ご帰国されましたら、早々にお会いしたいのですが……」というものでした。その後メールと電話で、番組の狙いについて、2,3回問い合わせをしてみると、実は私が2011年11月光人社NF文庫から刊行した『海軍良識派の研究』と、それから2年後の2013年2月に出版した『海軍良識派の支柱 山梨勝之進—忘れられた提督の生涯』(芙蓉書房出版)が底本になって、この番組が企画されたことがわかりました。

この数年間、私としては精力的に海軍良識派(条約派)に狙いをつけて執筆をしてきたつもりでしたが、期待に反してさほど目立った反応はなく、気落ちしていたところでした。その矢先のことだっただけに、拙著が世間から認められたとの思いが

あり、飲みひとしおのものがありました。

私は 36 歳の時、政治学博士の学位を取りましたが、その学位論文は『日本海軍・太平洋戦争開戦原因』と言うもので、4 百字詰め原稿用紙にして 1500 枚ほどのものです。博士課程時代の、27 歳から 31 歳にかけての論文です。そのテーマは、「なぜ日本海軍が太平洋戦争を決断したのか？」について真正面から考察したものです。それまで日本陸軍のファッション的体質や太平洋戦争を主導した原因については、さまざまな研究がなされてきましたが、日本海軍の開戦原因と責任について、正面から研究したものはほとんどありませんでした。

昭和 50 年当時、戦前・戦中に海軍省や軍令部の中枢にいた将官の方々が、まだ何人か生存しておられましたので、そうした方々を 20 人ほど訪ねてヒアリングしました。そうすると次第に、日本海軍を対米戦争に主導していった海軍内のグループの存在や軍人の存在が明らかになってきたのです。そうした将官の人たちを、「艦隊派」「軍令部派」と呼びます。

その一方で、日米不戦派の将官の存在も次第に明らかになりました。こうした人々を、「条約派」「良識派」、あるいは「海軍省派」と呼びますが、私の問題意識は、開戦前の昭和 15、6 年頃、なぜ海軍良識派の人々が中央から遠ざけられて、艦隊派が主流になったのかということにあります。

今回の番組で取り上げた山本五十六(やまもと・いそろく)や、海軍兵学校で山本五十六と同期(32 期)で親友だった堀悌吉(ほり・ていきち)などは、「良識派」の代表格でした。

太平洋戦争に敗北したこともあって、今日では軍人(自衛官)に対する社会的尊敬は余りありませんが、戦前はそうではありませんでした。身体堅固な男子であれば、まず陸海軍人になることが、夢でもありました。中でも海軍将校になるためには、海兵に合格しなければならず、定員が少ないこともあって、難関中の難関でした。倍率は優に 20 倍超ですから、ものすごいものがあります。

明治政府は別称「薩長藩閥政府」ともいわれますが、官軍に属する藩の青年たちには官僚の道が拓けていましたが、旧左幕派の藩に生まれた青年たちにとっては、官界は出世の道が狭まっていました。こんなこともあって、彼らにとって将来進むべき道は、軍人になることでした。

東京帝国大学などに入れば、学資や生活費がかかります。従って帝大には比較的裕福な家庭の青年は入学することができましたが、落ちぶれ旧士族の子弟たちにとっては、それは適いませんでした。

陸士や海兵に入れば、学費がかからない上に、手当てが貰えます。そこで旧佐幕派の藩の特に学力の優秀な青年たちは、郷土の汚名挽回と復権を担って、こぞって陸海の軍学校を受験したものでした。今回の番組の中心的人物である山本五十六と堀悌吉の場合も、旧佐幕派に属する藩に生まれました。くすぐったくも少し嬉しくなりました。

【2】山本五十六は、明治 17 年(1884)雪深き越後盆地に位置する旧長岡藩の高野貞吉の子として生まれました。五十六が海軍大学校を卒業し、海軍少佐として将来を嘱望される人物と目されるようになった 32 歳の時、長岡藩の家老だった山本帯刀の家を継ぎ、山本に改姓しました。「いそろく」の名は、父・貞吉の 56 歳の時に授かった子供だったことに由来しています。

高野家は代々家禄が 120 石の長岡藩の儒官(祐筆役)で、兼ねて槍術師範役でもありました。五十六が達筆な訳は、こんなところにもあります。

昭和 16 年 12 月 8 日の太平洋戦争開戦にあたって、山本五十六は連合艦隊司令長官として真珠湾奇襲を指揮しました。昭和 18 年 4 月 18 日、五十六はブーゲンビル島上空で米軍機の待ち伏せに遭って戦死するまで、全日本国民の衆望を集めた指揮官でした。こうした山本五十六が、果たしていかなる人物だったのかについて問うたのが、今回の企画でした。五十六が本当に心を許した親友に、海兵同期の堀悌吉がいました。この堀は、海兵始まって以来の大秀才といわれた人物で、成績が常にダントツでした。平時の海軍では、大佐までは、成績順に任官するシステムになっていました。これを俗に「ハンモックナンバー」と言っております。もし堀が海軍軍人の道を選ばなければ、東京帝国大学の教授になっていたことでしょう。

堀は、海軍の最もエリートコースである、海軍省軍務局員、海軍省軍務局第一課長を経て、昭和 5 年のロンドン海軍軍縮会議当時は、軍務局長の職にありました。ところがこの軍縮条約をまとめた主要な責任者の一人ということから責任を取らされて、将来海軍次官、そして海軍大臣になることを確実視されている中で、昭和 9 年 12 月、突如予備役に編入されることになったのです。

堀は大分県杵築市出身です。大分県では以前から「先哲史料館」を設立し、同県出身の偉人の史料収集と伝記の編纂を進めてきましたが、数年前、堀の遺族が所蔵している書庫の中から、五十六の書簡や半切が大量に発見されたのです。この五十六の書簡を読めば、いかなる気持ちで、真珠湾奇襲作戦に臨み、その後戦ってきたのかの実相がわかるのです。紙面の関係もありますので、五十六の胸中を表わしていると思われる堀宛の手紙を 2、3 ご紹介しましょう。

①、昭和 16 年 10 月 11 日付、五十六から堀宛。(対米開戦を目前にして)「個人としての意見と正反対の決意を固め、その方向に一途邁進の外なき現在の立場は、誠に変なものなり。之も命というものか」

②、昭和 17 年 10 月 2 日付、五十六から堀宛。「自分も帰れるやわからないから(留守家族のこと)適当頼みます。山梨(勝之進)ではないが、『運命だよ君』とでも言う所だろう。もうとうとう 1 周年ともなったが、あれだけハンデキャップをつけて貰ったのも、おいおいすり減らされる様心細い」

③、昭和 18 年 3 月 6 日付、五十六から堀宛、(五十六戦死の 1 ヶ月前)「それではお大事に」

④昭和 18 年 4 月、五十六の辞世の歌と思われるもの「天皇の御盾と誓う真心は 留めおかまし 命死ぬとも」

いかがですか。親英米派の五十六としては、米国相手に戦争をしたくはなかったのです。それでも連合艦隊司令長官としての立場からすれば、閣議で開戦と決まったものに対しては、従うしかなかったのです。ミッドウェー海戦の

敗北以降、五十六は、どうに覚悟を決めています。

私も今年で 67 歳となりました。さまざまな人生経験を積んだことによって、ようやく人生の何事かを自分の言葉で語れるようになったように思います。

立派な歴史家になるためには、単に知識を詰め込むだけでなく、自分の体験から滲み出た歴史観を語らなければならないと思っている次第です。

平成 25 年歴史探訪レポート

第 2 回歴史ハイク「鎌倉めぐり」

監査 桐山 有節 (昭和 33 年卒)

去年は、「江ノ電めぐり」を催し、「極楽寺」「御霊神社」「竜口寺」(竜の口法難の跡)などを探訪しました。本年は、大功寺(だいぎょうじ)～本寺～妙本寺～比企ヶ谷(ひきがや)～安国論寺～常栄寺

(ぼたもち寺)を、散策しました。

大功寺は、頼朝が富士川の合戦で、平家打倒の「戦勝祈願」を行った寺院で、合戦の結果、源氏が大勝し、縁起の良い寺として知られています。

本覚寺は、東の身延とも呼ばれ、日蓮大聖人の「御生骨」が、この寺院の後ろ側の日蓮分骨堂に安置されています。



比企ヶ谷は、もと比企氏の屋敷があった所で、比企氏滅亡後、ただ一人残った比企能本(よしもと)が、妙本寺を建立して、一族の霊を慰めたと言います。安国論寺は、日蓮大聖人が鎌倉幕府に提出した建白書「立正安国論」を執筆した所です。幕府の宗教政策を批判し、直ちに改めるように五代執権である北条時頼に提出した建白書で、日本の民衆を救わんとする日蓮大聖人執筆の国家練曉の書です。



平成 25 年イーグル会 ゴルフコンペレポート

飯澤 武 (昭和 36 年卒)

安部浩会長下、小生が副会長している時に久しく途切れていたゴルフコンペを再開した。第 1 回を 24 年 5 月 25 日、越生 G C で実施した。名称も校章の鷹からとしてイーグル会とした。第 1 回参加者は 6 名と寂しかったが、その時の優勝者大滝二三夫君(S37 年卒)にイーグル会会長を引き受けてもらい、



第 2 回大厚木 G C 参加者 10 名、第 3 回リバーサイドフェニックス G C 参加者 9 名、第 4 回平成俱樂部鉢形城コース参加者 11 名と徐々に参加者が増えて和気藹々と大空の下でゴルフを楽しんでいます。第 3 回の時、希望者だけゴルフ場近くで前泊、前夜祭を催したところ大好評で、その後も好評裏に続いています。



80 才の大先輩土屋さんは毎回出席で第 2 回の優勝者です。ゴルフは年齢に関係なく出来るので何時までも元気で出て欲しいと思っています。大滝会長が労を惜しまず会務を取り仕切ってくれるので増々盛んになることと思っています。新ペリアですから誰でも優勝のチャンスがあるので新人、特にもっと若い人の参加が多くなれば更に活性化するでしょう。

平成 25 年総会・懇親会レポート

“台風を乗り越えた団結力！”

総務担当役員 今 憲行（昭和 43 年卒）



2013 年 10 月 22 日（総会本番 4 日前）同窓会役員に緊急メールが回った。

内容は日本列島に接近中の台風 27 号が上陸した場合の総会・懇親会への対応手順だった。えっ！会場へのキャンセル連絡、一般参加者への手分けによる電話作戦等が記されていた。

総会担当として、「台風は来てもキャンセルだけは逃れたい。」必死の想いで祈るほかなかった。

そしてハラハラドキドキで本番 10 月 26 日（土）を迎えた。雨は止まず、不安を残しながらも、会場の「銀座ライオン」へ向かった。スタッフも集合し会場の準備が進み、参加者も雨の中徐々に集まり、お互い声をかけ合いながら、座席も埋まり始め、ようやく気持ちが落ち着いてきた。

総会は参加者 90 名の中、11 時過ぎに始まり、守谷会長挨拶に続き、黒澤副会長進行の下、議案も無事可決され終了。その後合同写真撮影をはさみ 12 時半に懇親会が始まった。御来賓の長井高等学校岸校長、遠藤長井副市長、同窓会本部勝見会長の方々からご挨拶を頂き、安部欣一様（昭 15 年卒）の乾杯でご歓談に入った。その後長年役員として活躍され、この度ご退任される飯澤副会長・沓澤事務局長そして斉藤監事からの暖かい激励メッセージに感謝の気持ちで一杯だった。

新企画として、地元長井から、玉こん、おみ漬け、つや姫など 14 種のふる郷の香り漂う出店があり大好評で完売となりました。また会場が音楽ホールという環境からピアノ、ステージも用意されたため、急速長井高時代の元ブラスバンド 3 名（藤野様 43 年卒・中田様 45 年卒・今 43 年卒）による演奏、また現在プロで活躍中の「エンリケ・ハ木リン バンド」（ハ木様 51 年卒）そしてソプラノ歌手で藤原歌劇団所属の「望月成美さん」（56 年卒）の歌唱と続きました。14 時半盛りだくさんのメニューを無事消化し、長井高等女学校、長井高等学校各校歌を大声で歌い締めくくりました。“皆様総立ちで歌い上げた校歌は若々しく健在そのもの。一瞬にして、あの高校時代の気持ちに戻れる校歌の力を改めて感じました。”（56 年卒望月様）傘を手に取り安堵の気持ちで会場を後にしました。外は朝までの台風が過ぎ、銀座通りは賑やかさをとり戻し、かすかな陽射しがまぶしく感じました。

今回総会担当として、予期せぬ台風と重なりましたが、「自分の役割を認識しその気になって行動する。」という大切さと、新しい企画にご賛同頂いた人、台風の中参加頂いた皆様を通し「勇気」という言葉を身に染みて感じ取りました。ストレスも多々ありましたが、一方で学ぶ事も多く、役員含め皆様の思いやりに触れた貴重な機会となりました。

最後になりますが、今年も 10 月 25 日（土）に総会が予定されております。

“皆さん、ぜひご参加お願い致します。”と申しますのは、①同窓・同郷の人が多いと盛り上がるのです。②テーブルを囲み皆さんが笑顔で話したり、飲んだり姿がうれしいのです。③思わぬ出会で元気になるのです。④たった 1 日の出来事が、新鮮に映り、ちょっと得した気分にもなれるのです。それに⑤「同窓」という響きは、暖かな親しみと繋がりを感じさせてくれるのです。

皆様とお会いできることを楽しみにしております。



平成 25 年度事業報告・決算報告

◆平成 25 年度事業報告(平 25. 6. 1～平 26. 5. 31)

役員会議の開催 5 回

・年間業務計画の策定、・前年総会・懇親会の総括と
本年の実施計画策定、・会報・HP の計画策定、・決算
および予算案の総会上程、・役員改選案の総会上程

学年幹事会の開催 2 回

・総会動員策の検討、・役員会議決議事項の報告

総会・懇親会の開催(平 25.10.26)

・90 名参加、母校から岸校長、本部から勝見会長、平
副会長、安部事務局長が臨席 事業報告、決算お
よび予算案の承認、・役員改選案の承認、・川野基金の
使用規定を制定することについての承認

本部主催の会議等への出席

・総会・集いの会、支部連絡協議会、幹事会

会報の発行(第 32 号)

《一般会計》 (平 25. 6. 1～平 26. 5. 31) 単位：円

収入の部			
項 目	当期実績	前期実績	差異
年会費	275,000	299,000	-24,000
懇親会費	712,000	688,000	24,000
寄付金	364,000	317,000	47,000
本部助成金	13,000	13,000	0
雑収入	3,640	0	3,640
前期繰越金	114,806	380,666	-265,860
(収入合計)	1,482,446	1,697,666	-215,220
支出の部			
項 目	当期実績	前期実績	差異
総会費	412,424	437,227	-24,803
懇親会費	606,000	779,930	-173,930
会議費	106,167	141,730	-35,563
通信費	27,625	50,040	-22,415
広報費	5,315	9,263	-3,948
支払手数料	30,400	25,440	4,960
消耗品費	42,456	79,230	-36,774
本部派遣費	82,643	60,000	22,643
予備費	15,052	0	15,052
次期繰越金	154,364	114,806	39,558
(支出合計)	1,482,446	1,697,666	-215,220

《特別会計》 (平 25. 6. 1～平 26. 5. 31) 単位：円

収入の部			
項 目	当期実績	前期実績	差異
雑入金	603	645	-42
前期繰越金	2,457,712	2,457,067	645
(収入合計)	2,458,315	2,457,712	603
支出の部			
項 目	当期実績	前期実績	差異
支出金	0	0	0
次期繰越金	2,458,315	2,457,712	603
(支出合計)	2,458,315	2,457,712	603

平成 26 年度収支予算案

《一般会計》 (平 26. 6. 1～平 27. 5. 31) 単位：円

収入の部			
項 目	予算額	前期実績	差異
年会費	270,000	275,000	-5,000
懇親会費	800,000	712,000	88,000
寄付金	285,000	364,000	-79,000

本部助成金	13,000	13,000	0
雑収入	0	3,640	-3,640
前期繰越金	154,364	114,806	39,558
(収入合計)	1,522,364	1,482,446	39,918
支出の部	予算額	前期実績	差異
総会費	315,000	412,424	-97,424
懇親会費	690,000	606,000	84,000
会議費	110,000	106,167	3,833
通信費	30,000	27,625	2,375
広報費	8,000	5,315	2,685
支払手数料	34,000	30,400	3,600
消耗品費	45,000	42,456	2,544
本部派遣費	50,000	82,643	-32,643
予備費	240,364	15,052	225,312
(支出合計)	1,452,364	1,482,446	39,918

《特別会計》 (平 26. 6. 1～平 27. 5. 31) 単位：円

収入の部	予算額	前期実績	差異
雑入金	650	603	47
前期繰越金	2,458,315	2,457,712	603
(収入合計)	2,458,965	2,458,315	650
支出の部	予算額	前期実績	差異
支出金	50,000	0	50,000
次期繰越金	2,408,965	2,458,315	-49,350
(支出合計)	2,458,965	2,458,315	650

編 集 後 記

母校は、2020 年に創立 100 年を迎える。100 年と言う歳月は伝統校の一つの条件ではなかろうか。あと 5 年と一寸である。東京オリンピックの年でもある。母校のお膝元である鷹桜同窓会の本部総会ではその雰囲気が出てくる。その空気をお届けするのも東京鷹桜同窓会の使命であり、会報とホームページ (HP) の役目かと思う。HP と合わせてご愛読頂きたい。

本会報は、創刊から 33 号を数える。33 号は、大奮発して 8 頁構成にした。近年 4 頁構成が続いたが、かつて 8 頁構成の時代があったので、8 頁復活の 33 号となった。エッセイとして芳賀文治、佐藤安、工藤美知尋各先輩の大作をもって、また会の活動を、桐山、飯澤、今の現、前役員によって紹介して頂いた。

母校の事、同窓生の事に関し、お伝えしたい事、お知らせしたい事がありましたら、事務局及び編集委員までお届け下さい。

編集委員会 委員長 黒澤俊雄
委員 工藤美知尋、江原明子
発行責任者 会長 守谷次郎

東京鷹桜同窓会事務局

〒285-0813 千葉県佐倉市石川781-18 斎藤方

☎・Fax 043-485-7571(斎藤の携帯) 090-4749-3533

(浅野の携帯)090-2623-3166

(Eメール)

siro-saito@hb.tp1.jp(斎藤)onlysun@catv296.ne.jp(浅野)